

(13.4%)であった。

そのうち51.2%が診療所, 48.8%が病院に通院し, 男性が52%, 女性48%であった。

年齢構成は男性では40歳~64歳, 女性では75歳以上が多かった。40歳未満は男女とも2~3%であった。

治療内容は全体で52%が投薬なしで, 10%の方がインスリン治療, 43%の方が経口糖尿病薬を使用していた。インスリン治療者は病院で多い一方食事療法のみの方も病院の方が多かった。

HbA1c 6.5%未満が全体の53%と多かったが, HbA1c 8%以上も11%いた。病院と診療所ではコントロール状況に差は見られなかった。

6 当院における糖尿病栄養外来の現状報告

~アンケート調査を実施して~

馬場 優子・伊藤香代子・田嶋 麻里
 笹木 知子・涌井 一郎*・片桐 尚*
 厚生連刈羽郡総合病院栄養科
 同 内科*

【目的】糖尿病栄養外来を構築するために, ①患者の病歴やHbA1c等の現状を把握する②糖尿病栄養外来に対する患者の考えを確認するという2点について検討した。

【方法】栄養外来の待ち時間を利用して患者にアンケート用紙を配り記入してもらう。又は栄養外来指導時に管理栄養士による聞き取りを行う。

【結果】2009年7月6日から8週間の調査期間中に198名より回答を得られた。年齢は20代から80代までの幅広い年齢層となった。血糖コントロールはHbA1c 8%台が最も多かった。病歴は0.5年から43年と幅広い分布であった。栄養指導は9割が受けたと回答したが指示量や主食量を覚えている人が少なかった。

【結論】血糖コントロール指標としてのHbA1c高値でコントロール不良であった。原因として栄養指導を9割の患者が受けているが指示量, 主食量を理解していない事が判った。この反省点を今後の糖尿病栄養外来の改善に応用していきたい。

7 2009年DM外来教室の改革

~新病院になって初めての試み~

山川 純子・佐藤美代子・梶井由美子
 細川 学・岡畑 美帆・高澤 哲也*
 上村 宗*

信楽園病院栄養科
 同 糖尿病・内分泌科*

当院では毎月DM外来教室を実施し, 医師・栄養士・コメディカルがそれぞれ毎月異なったテーマで講義をし, 6月・11月に試食会を行っている。従来6月はDM基本食の試食, 11月はバイキング試食会を行っていたが, 和食薄味の献立が多く, 外食時応用しにくいなどの問題点があった。また, 設備の制約で火を使った実習ができない, 全教室を通してテーマがマンネリ化していることも課題であった。09年度は試食会を「より実践的で目新しい教室」を目標に行った。6月は「外で食べる中華料理」をテーマに, 予めおかずを1単位ずつ盛り分け, バイキングを行った。1単位にすることにより, カロリー・塩分量をわかりやすく体験してもらった。11月は「手巻きすし&野菜すし」をテーマに, 火を使わず実習を行い, 減塩やカロリーオーバーを防ぐ寿司の食べ方を体験してもらった。いずれも, 実践的で目新しいと, 患者及び家族, DMスタッフに好評であった。

8 新発田地区糖尿病地域連携バス運用1年間のまとめ

酒巻 裕一・本間 則行・山崎美穂子
 若杉三奈子・大瀧 陽子*・遠藤 昌子*
 渡辺由美子**・山田 邦子***
 県立新発田病院内科
 同 看護部*
 同 地域連携センター**
 同 栄養課***
 新発田地区糖尿病地域連携バス研究会

当院は2008年10月より, 近隣の診療所, 計11施設と新発田地区糖尿病地域連携バス研究会を発足させ, 糖尿病地域連携バスを作成した。SDM 2008を参考に診療所への逆紹介基準, また病院へ

の紹介基準を作成し、6か月毎に当院を定期受診のうえ評価し、あわせて栄養指導、糖尿病療養指導を行うこととした。2010年1月までに、計105名が導入に同意し、うち71名が初回6か月後の評価を行われた。導入前、平均HbA1c 6.57 ± 0.59%、6か月後、6.77 ± 0.74%であったが、パスを継続できた53名は6.59 ± 0.64%と有意な増悪はなかった。パスを逸脱した18名(25%)の理由のうち、コントロール、合併症の悪化が7名(9.8%)、また受診中断が5名(7.0%)にみられた。今後の連携継続にあたっての検討事項として、合併症発症率の評価、連携病院間の治療の標準化などの方針、患者理解や満足度などが挙げられる。

10 頸動脈超音波検査

～当院の検討と症例～

丸山千恵子

長岡赤十字病院検査技術課

【はじめに】食生活の欧米化、運動不足などにより、動脈硬化に基づく心血管、脳血管障害等が増加している。頸動脈超音波検査は全身の動脈硬化の評価、脳血流の関節的評価に広く用いられ、糖尿病の合併症の検査としても重要な役割を果たしている。今回、当院の頸動脈超音波検査のブラークスコア(PS)とmax.IMTの検討と症例を報告する。

【対象と方法】2009年1年間の707名のうち糖尿病と脳梗塞の458名、男性272名、女性186名、27歳から97歳、平均年齢67.5歳を対象に糖尿病、脳梗塞、両方の3群を性別、年齢別に分けPS、max.IMTの平均を求めた。

【結果】糖尿病群は脳梗塞群と同程度のPS、max.IMTで、年齢と共に上昇し、健常者に比べ明らかに高値を示した。危険因子と動脈硬化の進行例、無症候性閉塞例も紹介する。

【結論】頸動脈超音波検査は経過観察や無症候性重症例を発見する上で有用である。

11 糖尿病患者における経皮的 advanced glycation endproducts の測定と合併症に関する検討

石澤 正博・古川 和郎・皆川 真一
森川 洋・阿部 孝洋・金子 正儀
植村 靖行・鈴木 裕美・山田 貴穂
小菅恵一朗・羽入 修・相澤 義房

新潟大学医歯学総合病院第一内科

【背景】AGEs(最終糖化産物)は、近年糖尿病(DM)とその合併症などとの関連が示唆されている。皮膚中のAGEs量が血中・組織中のAGEs量と相関することから、非侵襲的に皮膚のAGEs沈着量を測定できるAGE Reader(TM)が登場したが、日本人でのevidenceはまだ乏しい。

【目的】DM合併症とAGEs量の関連を解析し、その有用性を検討する。

【方法】DM・耐糖能異常の患者の皮膚AGEs量(AF値; Autofluorescence)の測定を行い、DMとそれに関連する各種因子との関連を統計学的に解析した。

【結果】AFと年齢、DM罹病期間には各々正の相関があり、HbA1c、血圧、各種血中脂質とは各々無相関であった。DM網膜症陽性群・蛋白尿陽性群・頸動脈硬化陽性群は、各々陰性群と比べて有意にAF値が高値だった。

【考察】AFは未知の合併症のスクリーニングマーカーとして有用な可能性が考えられた。

12 LH-RH 誘導体使用後、HbA1c の急上昇を認めた 2 型糖尿病の 1 例

竹田 徹朗・竹山 綾・蒲澤 秀門
飯野 則昭・坂爪 実・成田 一衛
齋藤 亮彦・鈴木 芳樹

新潟大学医歯学総合病院第二内科

症例は43歳、女性。2002年よりnon IgA腎症と糖尿病にて経過観察中で、HbA1cは6~7%台で経過していた。2008年より過多月経と貧血にて産婦人科に通院中であったが、2009年7月に子宮筋腫の手術を希望し、術前の筋腫縮小を目的にLH-RH誘導体(Leuprorelin)が開始された。開